



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報

第16号



編集・発行 東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2018年3月27日

〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL (022) 795-7556 FAX (022) 795-7583 E-MAIL <int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp>

人生100年時代の大学

小野 尚之

(国際文化研究科同窓会会長・言語科学研究講座教授)

今や「人生100年時代」なんだそうである。織田信長の時代には、(史実として正確なのかどうかは分からないが)人は「人生50年」を覚悟して生きた。しかし、今はその倍、人間は重荷を背負って長い坂道を歩かなければならなくなった。

「人生100年時代構想会議」——これは、安倍政権が「人づくり革命」の政策を実現するため立ち上げた諮問会議である。その目標は次のように述べられている。「一億総活躍社会実現、その本丸は人づくり。子供たちの誰もが経済事情にかかわらず夢に向かって頑張ることができる社会。いくつになっても学び直しができ、新しいことにチャレンジできる社会。人生100年時代を見据えた経済社会の在り方を構想していきます。」(首相官邸ウェブサイトより)

言うまでもなく、「人生100年時代」を考えなければならなくなった理由は、今後益々進むであろう少子高齢化社会への対応に一刻の猶予も許されないという危機感からである。この目標の中にある「いくつになっても学び直しができ」という部分が、大学の果たすべき役割に最も深く関わる部分である。今回はこのような社会情勢を背景にして、本学で進行しているいくつかの動きについてお伝えしたい。

本学は昨年6月に、東京大学、京都大学とともに「指定国立大学法人」に指定された。指定国立大学とは、「世界最高水準の教育研究活動の展開ができると、その実力と潜在能力を認められた国立大学であり、日本を代表する大学として世界の発展に大きく貢献することが期待される」大学であると謳われている。国際文化研究科は、その構想の一端を担うべく、二つの国際共同大学院プログラム「日本学国際共同大学院」と「災害科学・安全学国際共同大学院」に、他部局との連携の下で参画している。平成29年度には、両プログラムともカリキュラムなどの基本構想を終え、いよいよ平成31年度から本格始動する運びとなった。これら新しいプログラムの目玉は、海外機関との連携と大学内部組織の緊密な連携ということである。これまでやったことがないほど部局間の垣根を低くして、時には相互に乗り入れる形でプログラムを実現させたのである。指定国立大学構想では、新たな大学院教育の仕組みを構築することが打ち上げられ、それを実現に近づけたものである。

もう一つの動きは、特に大学院を中心にした教育組織改革の流れである。これは実は数年前から始まっていて、3年ほど前には人文社会科学系の学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学の役割等を踏まえた組織見直し計画を策定することが求められた。また、全国の大学を評価する「認証評価」において教育の内部質保証がより重点的に求

められるようになった。これによって、本学において教育組織改革の推進が今後大きな課題となって現れてくるだろう。この改革への動きは、先に述べた指定国立大学構想と無縁ではない。なぜなら、教育の質保証で見直すべき問題として、博士後期課程の定員充足率があり、指定国立大学構想の新たな大学院教育の仕組みづくりもここに直結してくるからである。

若年人口の減少が今後一層加速するのは間違いないので、新卒入学者数は大学院といえども減っていくであろう(すでに現状がそうなりつつある)。とすれば、「人生100年時代」では、先に述べた「いくつになっても学び直しができる」ことが大学に求められるようになるだろう。しかし、これは実は日本ではなかなか定着しなかった。かつていわゆる「生涯教育」や「リカレント教育」という概念が制度化されようとしたが、結局、尻すぼみになって終わってしまった感がある。ある記事によると、OECDの最新のデータでは、高等教育機関への入学時の年齢で25歳以上の学生の比率が、OECD加盟国平均21%に対して、日本は1%にも満たないそうである。この数字は、日本において、社会と大学を行き来することの難しさを浮き彫りにしている。しかしそうは言っても、新しい大学院教育の仕組みづくりにおいてこの問題を避けて通るわけにはいかないであろう。

多少硬い話になったかもしれないが、この1年の本学の動き、それから本研究科の課題のようなものを社会の情勢との関連でご報告した。本研究科の1年間の教育研究活動については、この後の記事で楽しんでいただくと、その背景にある伏流をご理解いただきたと思った次第である。

それにしても、「人生50年」と「人生100年」、どちらが人にとって幸福なのだろうか。

第16回同窓会総会と講演会のご案内

第16回同窓会総会と同窓会講演会を次のとおり開催します。またこれに引き続き国際文化研究科平成29年度修了祝賀会が開催されます。同窓会会員の皆さまにはどちらにも奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時：2018年3月27日(火) 15時～

* 研究科学位記伝達式に引き続き開催しますので、会員の皆さまは14時20分の学位記伝達式からご臨席ください。

場所：マルチメディア教育研究棟6階大ホール

講師：坂本 祐太 専任講師

(中京大学・言語科学基礎論講座博士前期課程修了)

演題：「国際文化研究科が私にもたらしてくれたもの
—過去・現在・そして未来—」

国際文化研究科同窓会事務局

第15回総会と講演会の報告

第15回総会を2017年3月24日(金)にマルチメディア教育研究棟6階大ホールにて開催しました。総会に先立ち、北原かな子氏による講演会を開催しました。

講演会要旨

「国際文化研究科で学んだこと —文化研究を志して—」

青森中央学院大学

北原 かな子

(比較文化論講座後期課程修了)

1. はじめに

私は1993年の研究科開設と同時に、一期生として国際文化研究科に入学しました。今日は学生時代の研究とその後の展開についてお話ししたいと思います。

私が比較文化論講座を選んだのは大学生の頃から文化研究に関心を持っていたためです。入学時は別のテーマを考えていましたが、当時の私は子育て中で、かつ弘前から仙台に通学していたため、「城下町弘前には西洋建築がたくさんある。外国人の文化的影響を調べてみたら？」という指導教員藤田緑先生の助言により、近代津軽の文化研究を始めることになりました。

2. 東奥義塾との出会い—資料探索方法の模索

現在も弘前にある東奥義塾という学校は、旧藩校の後身で1872年に開学しています。草創期から外国人教師が着任し、いろんな影響を及ぼしました。この教師たちの軌跡を調べることから研究は始まりました。研究を進める中で、アメリカにも資料があることがわかってきました。ただ、当時学生で子育て中だった私には、それを調べに行く時間もお金もないわけです。そこで資料を所持しているのではと思われる資料館や図書館に次々に調査依頼を送ってみました。一般にみな協力的でしたが、特に津軽に関する資料を多く所有するデポー大学資料館からは本当に多大なる協力を得ることができました。手伝ってくれた方にはこまめな礼状書きを欠かさず、クリスマスシーズンにはカードを送りました。自分に協力してくれるネットワークを作ったわけです。

こうしてかき集めた資料で修士論文、博士論文と書いていきました。一度も現地調査ができなかったことは残念でしたが、博士号を取得し、それから三年後に日本学術振興会科研費の助成で出版にこぎつけたことから、2005年に秋田看護福祉大学に職を得ました。早速科研を申請し、2006年に採択となって初めて渡米調査ができました。今にして思えば、渡米調査をしていなかったからこそ、その必要性を書くことで科研の申請書がむしろ書きやすかったように思います。何が幸いするかわからないという一つの例かもしれません。

3. 洋学から洋楽へ—現在の研究

その後、幸いなことに科研の助成を得ることで研究を進め、いろいろな資料も掘り起こし、現在は音楽という視点から近世-近代移行期の歴史を見る研究を進めています。タイトルは「近代移行期における「音」と「音楽」—グローバル化する地域文化の連続と変容—」です。音楽と身分が結びついた近世期から近代に変わった時、階層性が崩れる中で音楽をめぐる様相を考えようとするものです。北奥の民衆から武士までを対象としています。目下のところ、民衆の音の世界が現在の芸能にどのように結びつき、また身分制崩壊に直面した武士階級が、社会の中でのリーダーシップを発揮して行く中でどのように西洋文化に対応したか、音楽の視点からみていこうとしています。特に今力を入れているのは仙台藩とハリストス正教と音楽です。音楽を含めた文化のグローバル化が西からの視点で語られがちだった中、北奥の地域性を踏まえた北からの視点を打ち出していきたいというのが現在の取り組みです。アメリカ、カナダ、ロシア、韓国の研究者に参画してもらって進めています。

おわりに

最後にこれまでの研究の中で経験した不思議なことについてお話ししたいと思います。

東奥義塾外国人教師として2番目にきたアーサー・マックレーは、帰国後日本についての本を著し、中に弘前のこともかなり書いています。しかし弘前ではほとんど知られていない人物でした。わずかな資料を手掛かりとして1995年10月に彼の出身校であるウエスリアン大学に調査依頼を送りました。11月11日に私の手元に同大学から資料が届き、そこで初めてマックレーについての詳細がわかったのですが、その資料には彼の没日が1930年11月11日とありました。つまり命日に届いたのです。さらに彼の著書には1874年11月11日に弘前を去ったことと書かれていました。弘前を去った日付とこの世を去った日付と私の手元に資料が届いた日付はすべて11月11日だったのです。これを偶然ととるか、何かの縁ととるかには人によるだろうと思いますが、私自身はやはり亡きマックレーの魂が何かを伝えたように感じたわけです。

人生には偶然とは思えないような出会いやご縁はたくさんあると思います。私は国際文化研究科で学べたことを礎としていままで歩んで来ました。一期生ですので、ここで学んだ方たちはみな、同期生かあるいは後輩にあたります。共に同じ研究科で学んだというご縁に感謝し、大切にしたいと思います。そして人生は何が幸いするか、わからない。「船は良い港に着くものだ」というのが、比較文化論講座の初代主任教授である小田基先生の御言葉ですが、それをそのまま皆さんにお伝えし、そして今後の大いなる発展を心から祈念して、私の話を終えたいと思います。ご静聴誠にありがとうございました。

第24回国際文化基礎講座の報告

第24回国際文化基礎講座(平成29年11月)では『映像とイメージのカレイドスコープ』と題して、本研究科の3教員が日頃の研究の一端を披露されました。ここにその講演概要をご紹介します。



小津安二郎の“戦争” —忘却への抵抗としての映画— 寺本 成彦(ヨーロッパ・アメリカ研究講座教授)

日本の中流家庭を描く名手と見做される小津安二郎(1903-1963)は、中国戦線への出征(1937-1939)、次いでシンガポールでの軍報道部活動・抑留所生活(1943-1946)といった、生死を分けるような過酷な経験を味わった。国民総動員体制の確立されていった時流もあり、実体験者として戦争映画を撮影したいという意欲が戦前の小津にはあったのだが、それが実現することは実際にはなかった。小津の「戦争映画」第一作となるはずであった『ビルマ戦線・遥かなり父母の国』の脚本を軍部に却下され、また日本軍の敗退のあおりも受け、戦意高揚を目的とする映画製作には遂に手を染めることなく敗戦を迎える。

焼け野原の東京を目にした復員後の小津は、社会リアリズムの強い『長屋紳士録』(1947)と『風の中の雌鶏』(1948)を完成させるが、その後は「泥中の蓮」の喩えによって示されるとおり、現実の明るく肯定的な面に焦点を当てた映画製作の方に方針を転換し、とりわけ『晩春』(1949)から遺作の『秋刀魚の味』(1962)に至るまで「娘を嫁がせる物語」の系列の映画作品がこの監督のトレードマークとなっていく。

このようにして“戦争”を封印してしまったように見られる小津の戦後の映画には、しかし、過酷な状況下で理不尽な死を遂げていった人々への哀悼・惜別が垣間見られるように思われる。戦争からの復興とともに忘れら

れつつあった“戦争”の痕跡を読み取る対象として、戦後の家族の風景を描いた作品群『麦秋』(1951)、『東京物語』(1953)、『秋刀魚の味』(1962)を取り上げ、<不在の次男>、<未帰還の次兄を待つ妹/戦死した夫を待つ戦争未亡人>、<盛り場で流れる『軍艦マーチ』>に焦点を当てながら分析を試みた。

オールドミスになりつつある紀子が映画末尾で唐突に結婚の決意をする(かのように見える)『麦秋』は、従来から海外の小津研究者によってストーリー上の断絶が存在すると評されていった。しかし、主要なストーリーから外れたところと言及されている不在の<次兄・省二>が、妹である紀子にとって最愛の家族であったことを忘れてはならない。その欠落した家族を省二の同級生である謙吉が補完しており、亡き兄の生きた時間を彼と共に追体験することでヒロインが結婚を決意したと考えられるからである。目に見える出来事のみではなく、不可視の登場人物こそがこの物語の決定的な結節点として機能しているように考えられる。

不在の次兄を忘却に付すことのできないこの紀子は、次に『東京物語』の同名のヒロインへと引き継がれる。そこでは戦死したと思われる昌二の遺影と共にアパートで一人暮らしをする年若き未亡人が、夫の両親からの再婚の勧めにもかかわらず一生独り身で過ごす決意をしたところで映画は終わる。このように不在の昌二に嫁いだままの彼女の姿は、たとえばそれから7年後の映画『秋日和』(1960)で同じく原節子が演じる未亡人・秋子が、娘を嫁がせた後に始まる終生の独居生活を決意するラストシーンに連なるものである。



戦後の盛り場で聞かれる『軍艦マーチ』を効果音として取り入れているのは、『東京物語』と『秋刀魚の味』である。前者では息子たちの戦死を嘆く父親たちの酒宴で響いている。戦時中、帝国海軍の圧倒的勝利(それが真実であれ、虚偽であれ)を知らせる「大本営発表」のラジオ放送の主題曲でもあったこの軍歌は、戦後日本においては射幸心をそそるためにパチンコ屋で再利用されていた。圧倒的な戦勝を祝う高揚感あふれるこの楽曲を背景に展開されるのは、10年ほど前に息子たちを戦死させてしまった父親たちの悲哀に満ちた会話であり、さらに宴席の窓の外には「温泉マーク」が光っている。名高い軍楽曲への斜に構えた批評的な小津の態度は、こ

の楽曲の含意へのパロディーを感じさせる画面構成からも受け取ることができる。

次いで『秋刀魚の味』では、『軍艦マーチ』はバーでリクエストされる曲として流され、老サラリーマン平山が閲兵式のまねごとをするためのBGMとなる。彼の「海軍式」敬礼に応えるのがかつての部下だけでなく、銭湯帰りのバーのマダムであるという痛烈なパロディーが展開されている。その遊戯がある時、若い世代の客から揶揄され、平山に深い幻滅を味わわせるのだが、映画末尾では、娘を嫁にやったばかりで傷心しきった平山を唯一慰撫してくれる調べとなるだろう。

“娘を嫁にやる”一連の作品が代表するような平穩無事なドラマの中に、小津は“戦争”の痕跡を刻み込むことを怠らなかった。戦後の経済発展と共に忘れ去られていこうとする戦死者・未帰還者をく不在>という状態で描き、どんなに時間が経っても受け入れ難い欠落として「次男」の死を繰り返し取り上げた。さらに、戦後社会のBGMとして鳴り響くようになった海軍の名高い軍楽曲を映画中に引用し、それを距離化しパロディーしながら、経済的繁栄を遂げる日本社会で徐々に希薄化させられる負の歴史を浮かび上がらせようとする。戦争映画を撮らなかった小津はこうして、かつての“戦争”が残した傷跡を戦後社会の風俗の中にすくい取るという、地道だが決然とした作業を続けたと言えるだろう。

**最近の韓国・中国映画のトレンドをめぐって
—岩井俊二『Love Letter』からの影響を中心に—
佐野 正人（国際日本研究講座准教授）**

東アジアの映画は相互に深い関連性を持っている。実際に合作やリメイクという形での関連ももちろんだが、それよりも同時期に同じような流行を見せていることが注目される。今回の講義では主に東アジアの「青春映画」について取り上げるが、2000年代に入った頃、韓流ブームに乗って韓国でも青春映画が流行している。また、やや遅れて2010年代に入って台湾、中国でも青春映画の流行が見られるようになる。そこにはどのような関連性があるのだろうか。そして日本映画はそこにどのように関わっているのだろうか。

東アジアでの青春映画の流行を遡っていくと、1990年代の日本映画、ことに岩井俊二監督の『Love Letter』（1995）が大きい影響を与えたことに気づく。また、同時期に流行した村上春樹の小説（特に『ノルウェーの森』）がやはり東アジアで大きな流行を見せ、両者が2000年代以降の「韓流映画」を生み出していく原動力となったと言っても過言ではない。岩井俊二監督の『Love Letter』は2年前に雪山の事故で死んだ恋人の藤井樹に手紙を出したところ、同姓同名の女性から返事が返ってきて、それから奇妙な文通が始まっていき、恋人の藤井樹の高校時代が回想されていく、という映画である。この映画は日本よりむしろ韓国・中国で大きな流

行を見せ、韓国では観客動員数140万人を記録した。舞台となった北海道の雪景色に代表される美的な映像や、手紙が重要なアイテムとなって時空を超えた文通が始まるようなロマンティックな設定などが、韓国人観客の好みに合ったためと考えられる。

またそこには韓国の民主化や日本大衆文化の開放が行われた1999年の時期にこの『Love Letter』が公開されたという絶妙なタイミングも預かっていた。韓国では1987年の民主化闘争以後に民主化が進み、その象徴とも言える金大中大統領が1998年に就任した時期であった。彼は日本大衆文化の開放を断行し、それと同時に「文化大統領」として映画、アニメ、放送プログラム、音楽、ビデオゲーム、デザイン等に対する大々的な投資と育成策を開始している。その中から2000年代の「韓流ブーム」が起こっていくこととなるわけだが、『Love Letter』の公開（1999）はちょうどそのような新しい息吹の中で行われ、それを象徴するものとなったのである。

このことは2000年に公開された『イルマーレ』、2003年に公開された『ラブストーリー』（原題：『クラシック（크래식）』）などの映画がともに時空を超えた手紙の文通というアイテムを用いていることからよく分かる。また『イルマーレ』では海辺の家というロマンティックな舞台設定や美的で抒情的な映像が用いられ、それらも『Love Letter』の影響と考えることができるだろう。

一方、中国、台湾での青春映画の流行は、2011年の台湾映画『あの頃、君を追いかけた』（原題：那些年，我们一起追过的女孩）から始まっている。その後、中国大陆でも『So Young～過ぎ去りし青春に捧ぐ』（原題：致青春）が2013年に公開され、本格的に青春映画の流行が始まっていく。

そこには中国映画の観客層が20代中心であること、また「80後」（パーリンホウ）と呼ばれる1980年代以後に誕生した世代が大きな社会的影響力を持つようになったことが、彼らの青春を扱う映画が増加した背景となったと考えられる。先に挙げた映画はいずれも1990年代に青春を送った「80後」の世代が主人公となっている。

こういった韓国や中国での「青春映画」の流行を追っていくと、ちょうど1990年代の日本での青春映画から、2000年代の韓国映画での青春映画の流行、そして2010年代の台湾・中国映画での青春映画の流行という線が見えてくる。そこには1990年代の日本でいち早く形成された都市的なライフスタイルが、東アジアの経済的、文化的成長とともに広く受け入れられていくという事情があったと考えられる。日本的ライフスタイルとは「カワイイ」ファッションに象徴されるような清純で透明感をもったファッションや、パステルカラーの小物などに代表されるもので、韓国では「ニッポンフィール

「Nippon Feel）」と呼ばれ、中国・台湾では「日本小清新」（リーベンシャオチンシン）と呼ばれている。岩井俊二の『Love Letter』はそのような「ニッポンフィール」や「日本小清新」の感性を代表するものとして受容されたのである。それは東アジアにおける新しい感性やライフスタイルの出現を象徴するものとして、その後の東アジアにおける共有の財産となったのである。

マイケル・ジャクソンの“Black or White” にみる多文化主義とアフリカ系アメリカ人の歴史

山内 玲（ヨーロッパ・アメリカ研究講座准教授）

マイケル・ジャクソンの死から数年経った現在、その死に至る経緯には白黒つかない謎が残されているが、それと同じくらいの謎として残されているのが、1990年代以降に顕著となる黒人ポップスターの＜白さ＞である。この白さとは、肌の色が明るくなったことを指している。この変化は、白斑という病気が原因だという本人の弁があったにもかかわらず、頻繁に繰り返された整形手術の副作用であるとか、幼少期の父親との関係に対する心理的反動であるとか、様々な憶測を招いた。その憶測の一つに、＜白人への憧れ＞という人種意識、平たく言えば「白人になりたい」という願望を肌の色の変化が体現しているというものがある。真実であるかどうかはさておき、この憶測が興味深いのは、そうした推測を可能にする人種問題がアメリカ社会に根付いていることの証左となっているからである。以上のことを念頭に置き、本講座では肌の色の変化が顕著になりだす1991年に発表されたショートフィルム“Black or White”の映像性をアフリカ系アメリカ人の歴史と同時期に趨勢を誇った多文化主義という文脈に置いて考察した。

11分程度のこの映像作品は、前半部と後半部に分かれている。前半部はアメリカ先住民や世界各国の民族衣装に扮した踊り手たちと共に踊るマイケルのダンスに、「黒か白かどうでもいいことさ」というサビのような、人種の差異にこだわることのつまらなさを伝える歌詞を重ね合わせることで、多様多様な人種・民族の人々が互いを尊重しあう多文化主義的な態度を表現しているように見える。だが、通称“Panther version”と呼ばれる後半部と併せて前半部を視聴すると、事はそう単純ではないことがわかる。黒豹から変身したマイケルが無言でダンスを踊りながら、人種蔑視の言葉が書かれた車窓を破壊することに窺われるように、黒人として人種差別を糾弾する極めて攻撃的なパフォーマンスを取っている。この変身が、公民権運動以後のアメリカ社会においてその戦闘的な黒人民族主義で知られた Black Panthers Party（黒豹党）を想起させることは、前半部で地球の上に座りスノードームで白人と黒人の

子供が一緒に遊ぶ姿(図①)が、1963年のキング牧師の有名な演説で語った夢を思い起こさせるのと同様、アメリカ黒人の歴史を踏まえたシナリオとなっていることを暗示する。単純化を恐れずに言えば、前半



図①

部は公民権運動において暴力に訴えることのない黒人の平和的抗議運動から展開した多文化主義を示しているのに対し、後半部は暴力も辞さない黒人民族主義に由来する反差別の主張を展開しているのである。

こうした構成から考えるべきは、誰の立場から誰に向けて人種問題や差別の問題を訴えるのか、という問題である。人種の壁などたいしたことではなく容易に乗り越えられるだと伝えているかのように見える前半部の結末は、「白人としてやっていく (to get by) のはタフなことさ」という歌詞のリフレインを通じて、その多文化主義的な主張が白人になりすます黒人の立場から為されていることを暗示する。その後続く後半部の意味を考えると、前半部のメッセージの字面だけしか受けとめないことは安易な視聴の態度と言えよう。下半身を強調して性欲旺盛な黒人男性というステレオタイプを誇張するダンスにより、黒人男性の怒りを演じる形を取って人種差別的言動を糾弾する攻撃的な姿勢は、マジョリティを構成する白人社会への対応を否が応でも意識せざるを得ないマイノリティの複雑な状況を示唆している。

だがこうした暗示的な要素も、その暗黙の前提となっているアメリカ黒人の苦難の歴史が認識されることなく視聴されると暗示そのものの意味が問われることなく、前半部の反差別的な歌詞の口当たりのよいメッセージだけが皮相的に消費されてしまう。象徴的なのは、このショートフィルムがテレビで放映される折には、歌詞がなくまた過激な表現を取っていることを理由に、後半部がカットされることも多かったという事実である。テレビの視聴者の多くは、差別を被ることを当然とせず、差別することにもされることにも無自覚でいられる特権を持つマジョリティに属していることが想定される。言い換えれば、後半部の過激な暴力性に眉をひそめ、そこに込められたメッセージから目をそむけることができるということでもある。そして、マイケルやショートフィルムの作り手がそうした視聴者の性質を意識していたことは、その結末にうかがわれる。マイケルのパフォーマンスをテレビで見ていた白人家庭の子供がその父親にテレビの電源を消されてしまう結末(図②)は、コミカルなアニメーションで戯画的に示され

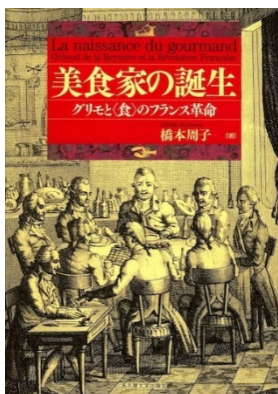
ることにより、人種問題に対する練りに練った表現もお茶の間で安易に消費されてしまいうるこの皮肉を暗示していると言えるだろう。



図②

国際文化研究科主催行事の報告

**研究科主催学術講演会
美食のヨーロッパ文化学（第3回）「フランス近代と〈美食〉—ガストロノミーのはじまり、社交のおわり—」
2017年12月8日（金）
野村 啓介（ヨーロッパ・アメリカ研究講座准教授）**



はじめに：講演会の企画趣旨について

本講演会は、大学院国際文化研究科の平成29年度科長裁量経費にもとづいて開催された研究科主催の学術講演会で、「美食のヨーロッパ文化学」と題するシリ

ーズものの講演会として企画され、今回がその第3回目となります。

その基本的な考えかたは、狭義のヨーロッパや一国の枠組にとらわれず（相対化し）、いわばトランスボーダーな視点からヨーロッパ食文化の諸相にアプローチすることです。とりわけ異文化の接触・交流という側面に関心の軸足をおきながら、食文化にかかわるさまざまな分野での研究の最前線をご紹介しますとともに、出席者が直接その研究者と議論する場を提供することをねらい、開催しているものです。

1. 講師紹介

今回は、フランス革命前後の時期を中心とする批評家の「美食の言説」に精通する滋賀県立大学の橋本周子（はしもとちかこ）氏をお招きしました。橋本先生は、ご著『美食家の誕生—グリモと〈食〉のフランス革命』（名古屋大学出版会、2014年）を刊行されたばかりですが、その内容の秀逸さはだれの目にも明らかであり、第31回渋沢・クロードル賞ルイ・ヴィトン特別賞を受賞されました。講演は、この充実した「美味しい力作」に盛りこまれた研究成果がふんだんに散りばめられたものになりました。

2. 講演内容

1.1. 食文化史の視角からみるフランス革命

周知のように、1789年に勃発したフランス革命は、フランスの政治と社会とが大きく変化していく一大画期となりました。その後、王政崩壊と共和政の成立、ナポレオンの登場、ブルボン王朝の復活、ナポレオン帝政の復興、そして共和政へ、などとフランスの19世紀史はまさに激動の時代になりました。しかし、大革命にともなう変革は政治や社会といった現象だけではありませんでした。それは、味覚という人生の楽しみにかかわる部分でも大きな変革を生むことになったのです。それはひとえに、美食を追求する態度の変化としてあらわれました。

歴史学においてもきわめて興味深いこうしたテーマに関して、橋本先生には、フランス文学の立場からフランス革命と「食」の秘められた関係をわかりやすく解説していただきました。それは、時代の転換期において食に対する喜び、楽しみといったフランス社会の意識がどのように変容していったのかという大きな問題です。したがってそれは、まさに大革命がフランスの美食文化誕生にどのような役割を果たしたのかという、文学研究の枠組をこえて政治



史・社会史の領域にもかかわる内容であり、したがって歴史学と文学を架橋するような非常にオリジナリティに富むご研究内容であるといえます。

1.2. グリモと「ガストロノミー」の成立

それにしても、橋本先生のご著書にある「美食家の誕生」とは、大変刺激的なタイトルではないでしょうか。フランス革命前にも、華やかな宮廷生活を送る王侯貴族がおり、そのなかに多かれ少なかれ美食家がいたはずで。すぐさま私たちは、ルイ 14 世のヴェルサイユ宮殿で繰り広げられる宴会を想起して、そのような疑問をもつことでしょう。

しかし橋本先生は、グリモ(Grimod de la Reynière 1758-1837)という日本ではほとんど知られていない美食家に着目します。同時代の美食家としては、『美食の言説』(岩波文庫)という翻訳で知られる本の著者であるブリア=サヴァランがわりと有名ですが、それとてピンとこない聴衆が少なくない想定されました。それだけに講演会では、こうした門外漢にもわかりやすく解説していただくことにしました。

グリモの独自性、それは美食に対するあくなき探究心の発露だったといえます。彼が生きた時代は、「おいしいご馳走」をめぐることば(美食言説)が急速に発展したころでもあります。これに大きく寄与したのがグリモでした。彼は、現代フランス人にみられる食の価値観に重要な痕跡を記したのです。

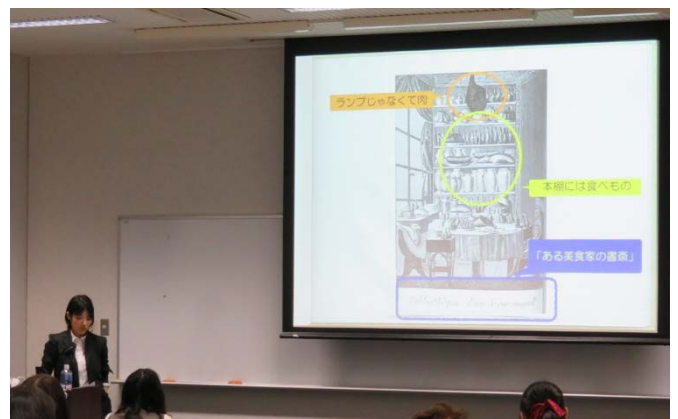


もともと、キリスト教(カトリック)信仰が根をおろしたヨーロッパ世界では、「食食(グルマンディーズ *gourmandise*)」が七大罪のひとつに数えられ、悪徳に属する行為であるとみなされていました。ところが、18 世紀にはいるころからグルマン(*gourmand*)という概念に、したがってその名詞形であるグルマンディーズ概念に変化が生じ、「美食学(胃の学問: ガストロノミー *gastronomie*)」という用語も使用されはじめます。こうして成立しつつあった「美食の教養」は、大革命前夜の社交界の基盤的思想につながっていったのです。

ところで、日本では食通という「グルメ *gourmet*」という語が知られていますが、それはもともとワイ

ン鑑定の専門家、ワイン仲買人をさすのが一般的でした。われわれ日本人が「グルメ」という語彙であらわそうとしている美食家というのは、正確に言えば「グルマン」であり、その行為が「グルマンディーズ」です。

フランス革命によって、貴族層の没落とともにパリを中心にレストランが勃興したことは周知のとおりです。では、そうした外食文化の出現があらわす歴史的意味とは何でしょうか。それはまさしく、「美食の教養」を身につけた新興社会層によって実践された文化でした。いいかえれば、そのような新勢力が革命をきっかけに台頭し、美食文化の支柱となっていくのです。ここに表出する美食文化は、「貪欲な社会的欲求」の表現でもありました。こうして、グリモの美食言説が示すところは、まさに革命フランスにおける社会的な広がりをもとむ「ガストロノミーのはじまり」であり、同時にそれは、旧体制下の貴族を中心とする上流階級によって展開された「社交のおわり」を意味するものともなったのです。それこそ、食文化をつうじて近代という時代が姿をみせる瞬間でもありました。



おわりに

グリモという美食家をつうじてフランス・ガストロノミーの真髄に迫ろうとする講演内容は、聴衆の関心を大いに喚起するところとなりました。くわえて、関西イントネーションに特徴づけられる軽快な語り口も功を奏し、和やかな雰囲気の中出席者を魅了することにもなりました。質問が多く寄せられたこともまた、講演内容に対する関心の高さを物語ります。なかには秋田からわざわざ聴講に来た学生さんなどもおり、企画者として熱心な聴衆の多いことに感動を禁じえませんでした。

橋本先生には、自身のご出産の直後という厳しい状況にもかかわらず、万難を排して遠路はるばる仙台までお越しいただきました。いくら感謝してもしつくせません。先生が研究活動をもっとも大事になさっている姿勢のあらわれをみたともいえましょ

か。私なども大いに教えられるところとなりました。あらためて、この場を借りて深謝申しあげるしだいです。

さて、食文化に関して興味深い研究を進めている研究者は、この日本にはまだまだいます。各分野の専門家から直接に話を聞けるという耳学問の機会は、忙しい現代人たるわれわれにとって非常に貴重です。研究科の財政状況はますます悪化の一途をたどっていますが、予算の都合がつくかぎり、学術講演会「美食のヨーロッパ文化学」は今後も継続することでしょう。いずれは講演会の内容を一冊の本としてまとめたいとも構想しているところです。関心をもたれた同窓生のみならず、近くにお立ち寄りの際はぜひともお運びくだされば幸いに存じます。

「世界発信する国際日本学・日本語研究拠点形成」の事業成果の紹介

クラウタウ オリオン（国際日本研究講座准教授）

本事業は2015年後期に発足し、国際文化研究科および文学研究科がこれまで組織的に進めてきた日本学・日本語研究の研究プロジェクトを発展的に統合し、世界の先端的大学と連携して日本学および日本学研究の国際研究拠点を形成し、その成果を世界に向けて発信することによって、本学がワールドクラスの大学へ飛躍することに寄与することを目的としてきた。

その背景として、「日本」を対象もしくはフィールドとする研究全般を広く「日本学」として捉えたと、この学問領域にはある共通の問題が存在した。それは、欧米における研究が西洋の視点から「他者」である日本を観るのに対し、国史学や国文学のような国内の研究は「自国」を観る視点しか持たず、そこに常に大きなずれが生じることである。しかし近年、両者の間で理解と対話の必要性が認識され、日本をめぐる研究全体を問い直す機運が高まっている。この点を踏まえて、本事業は、日本研究にかかわる従来の様々な問題を念頭に置きつつ、グローバル社会における新たな日本学の構築、学際的で開かれたディシプリンの創出を目指してきた。

本事業を始めてからの約2年半、世界において注目されるような研究成果を、シンポジウムやワークショップ、そして国際学会でのパネルセッションなど、学内外の研究者と合同で、様々な形で公開してきた。海外からの研究者の招聘や出版物の発表も含め、2015年10月から2018年3月に至り、小野尚之研究科長を代表とする「世界発信する国際日本学・日本語研究拠点形成」プロジェクトは、30件以上の企画を実現してきた。そのすべてを詳細に語ることは、紙幅の関係で不可能であるが、代表的なものを取り上げつつ、本事業の成果の紹介に努めたい。

例えば、事業が発足して間もなくの2015年度に、共催の形でふたつの国際シンポジウムを開催している。

2015年10月29日から翌日にかけて、イタリアのフィレンツェ大学で、ヨーロッパ各地の日本学を代表する研究者が集まり、「対象としてのニッポン、方法としてのニッポン」という総合タイトルの下で、分野のあり方について議論した。東北大学からは、文学研究科および国際文化研究科の教員が参加し、欧州の大学との学術交流を深めた。そして同年の12月16日から18日まで、同じく文学研究科と国際文化研究科の教員が、中国の北京大学および南開大学にて学術交流会・日本学講演会を開催し、中国における学術連携を展開する上での極めて重要なステップとなった。

2016年度は、特に中国、韓国、北米において国際連携による共同研究を強化するため、北京大学との国際共同ワークショップ、シカゴ大学から研究者と大学院生を招いてのプログラム、東アジア日本研究者協議会への参画、韓国翰林大学との国際シンポジウム開催などを行った。2016年9月に、アメリカ・シカゴ大学歴史学部の教員1名と大学院生7名が来日し、東北アジア研究センターの荒武賢一朗から、学際プロジェクトの一環として、日本における歴史資料の調査と研究方法を学んだ。

そして12月に、ソウルで行われた東アジア日本学研究者協議会でパネルセッション「言語から見た日本文化」を開催し、「配慮」なる行為の言語的意義をめぐって、中国および韓国の研究者と議論した。そして翌年2017年の3月に、韓国の翰林大学で、国際日本学シンポジウム「帝国日本の空間と移動」を開催し、「大日本帝国」の形が定着した時期に焦点を当て、日本特有の移動に関する問題や、現在につながる移動後の社会とそのあり方を検討し、国際社会における人の移動から生じる普遍的な諸問題への対処を議論した。

最終年の2017年度も、国内外で多くの企画を開催した。例えば、来日したオスロ大学の文化研究・東洋学研究科の教員と、震災後の東北地方における宗教とエコロジーについて考える国際ワークショップを7月に仙台で開催し、12月にはオスロで、国際文化研究科および文学研究科の教員が参加したワークショップ「日本史における仏教への新視点」も実現できた。また、ポルトガル・リスボン新大学の教員を招聘し、映画『沈黙—サイレンス』（スコセッシ監督、2016年）を軸として、現代日本におけるキリスト教のイメージや、海外における日本宗教のイメージについて議論した。そして8月に、代表者の小野研究科長を始めとする本学の教員がポルトガルに赴き、欧州日本研究協会（EAJIS）のイベントとして、「Japanese Studies in Japan: A New Trend?」というパネルセッションを主催した。

以上のように、非常に充実した企画をこの2年半、様々な形で展開してきた。これらの企画を通して本学の知名度をアップしつつ、その成果が2019年度に発足する「日本学国際共同大学院」へと繋がっていくことを願う次第である。

「アルムニひろば」同窓生のコラム

趙 凌梅

上海海洋大学日本語科 講師

(言語文化交流講座博士後期課程修了)

私は元言語文化交流講座の修了生で、現在上海海洋大学日本語科に所属しています。2009年に研究生として国際文化研究科に入学し、2010年～2012年に博士前期課程、2012年～2016年に博士後期課程に在籍していました。修了後もしばらく特別研究員として研究科に残り、そしてその後帰国し、2017年から上海海洋大学外国語学院日本語科で勤めています。

上海での最初の一年間は、主に日本語教師という仕事に馴染むために色々勉強させてもらいました。例えば、他の先生の授業を傍聴したり、時々代わりに授業をさせてもらったり、日本語スピーチコンテストの指導をしたりして、この大学の日本語科の授業と学生生活の在り方を覚えてきました。また、新入教員の教員研修(FD)などにも参加し、シラバスやパワーポイントの作り方から、学生に集中させるコツ、効率的な宿題の出し方まで、新入教員に必要な知識を教わりました。2017年は、私にとって「学生」の視点から「先生」の視点に上手く変われるように頑張る一年でありました。といっても、「学生」の視点を捨てることではありません。むしろ「先生」になっても、「学生」の視点を持つことはとても大事なことだと思います。例えば、FDの宿題でシラバスを作ったことがあります。最初は「先生」の立場に立って、「この授業を通して何を学ぶことができるのか、何を身につけられるのか」ということを中心にシラバスを作りました。でも作り上げたら何か物足りないなあと感じましたので、「学生」の視点に戻って考え直してみました。学生時代に、同級生と一緒にシラバスを読んで授業選びをしたときは、授業内容のほかに、私たちはいつも期末の時に「試験」か「レポート」かという評価基準を見て、そして「レポート」でしたら、何ページが必要なのかを細かく確認していたことと思い出し、自分が作ったシラバスの内容を見直すことができました。

また、学生にとって楽しくて得るものが多い授業ができるように、よく大学院で勉強した頃のことを思い出していました。先生方の授業、笑顔、それとゼミでのややきつめのコメント(笑)も、今では大変励みになっています。

今年の冬休み明け、つまり今学年の下半期から(中国の大学は日本の大学と違って、普通は9月から翌年の8月までが1つの学年となっています。そして「春休み」がなく、その代わりに少し早めに「冬休み」があります)、私は日本語科一年生の「日本語リスニング」と三年生の「日本語通訳」という2つの授業を担当することになりました。日本語リスニングの授業では、いつも数字や日付の言い方などを学生達と一緒に勉強することから始まり、そして「お誕生日はいつですか」、「京都へ行って紅葉を見ました」などの文法を説明することも多いのですが、リスニングの練習では、日本の大学生の学生生活や日本でのゴミの出し方などの話題もたくさん出てきます。留学生活で経験したことを話しながら、日本の言葉と文化を教えることができ、とても幸せだと思います。もう一つの「日本語通訳」の授業では、「出迎え」、「打ち合わせ」、「観光」、「シンポジウム」等の場面に合わせて、日本語と中国語の対訳の練習をやっていきます。また、通訳をするときは発言者の会話を正確に聞き取り、それを短い時間で整理し、聴取者に分かりやすく伝えることが大事ですから、単語、文法などの言葉の問題だけではなく、通訳するための精神力、反応力と持続力の練習も必要です。私は学生時代に通訳について勉強したことがないので、模索しながら授業をしており、多少心細いこともありますが、「授業をする」ということは、「教える」だけではなく、「学ぶ」ことでもあるとしみじみ感じています。

仕事に就いてから、毎日バタバタしていて、研究をする時間は学生の頃に比べると少なくなってしまう、焦ったりすることもありましたが、幸いなことに私の博士論文『日本語における差別語概念の変遷—1960年代以降の差別語問題から考える』に若干の修正を施したものが、去年の12月に上海交通大学出版社から出版されました。日本での研究成果がこのような形で発表できたことに大変嬉しく思い、そして、これをスタートに、研究者としての道もしっかり歩んで行きたいと思います。

東北大学大学院国際文化研究科での勉強と研究を通して身につけた語学力、思考力や学習への態度と信念が、私にとって一生の宝物になりました。そして、これからも、自分の信念を貫きながら、「夢を願う 誓う 信じる 叶う」ことを、学生達に伝えていきたいと思っています。

事務局より

①「アルムニひろば」について

14号から新たに同窓生のコラム「アルムニひろば」を設けました。「アルムニ alumni」は同窓生を意味するラテン語です。このページでは、修了後の同窓生の活動を紹介してゆきます。投稿も歓迎いたします。

②同窓会メールマガジンについて

事務局では会員の皆さまに興味をもっていただける情報を随時お届けしたいと思います。また、会員の皆さまからもメールマガジンに掲載してほしい情報などをお寄せください。

③メールアドレスについて

メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

国際文化研究科同窓会

<int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp>

④同窓会ホームページ

これまでの総会、理事会、会報、その他の資料を掲載していますのでご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/alumni/>

⑤同窓会懇親会について

事務局では今後とも会員の要望に基づき懇親会を開催したいと考えていますので開催希望などお寄せください。

⑥ご意見・ご提案等を！

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたらご連絡願います。お寄せいただいた個人情報は厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

⑦会費・寄付金の納入のお願い

会則第11条第1項及び12条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

○入学、進学及び編入学者で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生：6,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生：

編入学者：8,000円

進学者：6,000円

○上記以外の方(修了生、在学生、現教職員・元教職員等)にはご寄付という形のご支援をお願いできますと幸いです。

○会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口にご納めください。

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号：02220-5-66621